Kodak Gray Scale
© Kodak, 2007 TM: Kodak

内閣文庫
番號 和 20436
冊數 32 (15)
函號 263 43

内閣文庫
和書
類
二〇四三六
號
二
冊
五
架
三三
函

和書門
類
二〇四三六
號
五八
函
三三
架
冊

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

詠花

僧惜俱

笄志鹿之心相念秋芽子之鐘禮零丹落僧惜毛

ものゝあはれ

秋名物 霧雨小雨也 之久 礼

初冬のころ、ものゝあはれ、久惜裳と、同じ、侍の言葉、

夕去野邊秋芽子未若露枯金待難

ゆふされば、のべのあきはぎ、うわのみつゆふ、とれなく、あきまちがてぬ、

秋ぞ、ものゝ時、なりて、なるる時、とも、侍ぬ、

集中、梅花雪を志手礼ぞ、とゝ、よめり、雪も、枯ハ沾の侍、つゆ、

なれつゝ、とゝ、つゝ、狩考べし、

右二首柿本朝臣人麻呂之謌集出

真葛原名引秋風吹毎阿太乃大野之芽子花散

まくずはらなびくあきかぜふくごとにあだのおほののはぎのはなちる

和名抄大和宇智郡阿陀陀禮可反、岩一内の大野と云ふ、はぎの

鴈鳴之来喧年日及見乍将有此芽子原雨勿零根

かりがねのきなくとしのひをしみつつあらんこのはぎはらあめなふりそね

はぎは秋をぞ八月をまちぐさいつれぞのおもときていはるぞおもふる

ふるく、原のまろはたやおるるあめにいつれ

奥山雨住云男鹿之初夜不去妻問芽子之散久惜嘗

おくやまのあまやどりせるをしのはつよにさらずつまとはぎのちるをしぬ

秋萩のすゑをしなべ夜のほどをいたくもふれば雨はやみぬ

ものをこそおもふるをしんよひきこゆれば雨はやみぬ

行ノ下之ハまノ誤

麻の衣妻こいばかくよるの

白露乃置巻惜秋芽子乎折耳折而置哉枯

たまつゆのおきまくをしみあきはぎををりておきてかれるかもかれる

巻十八橘とよめるもこれなり、松豆可良之乎、いつれハ本よりこれを合枯

なりとハ云ふ、されハ枯ると惜しみて折てかれるなり

秋田苅借廬之宿雨穂経及咲有秋芽子雖見不飽香聞

あきたかるかりほのやどのあまほすとさけるあきはぎみれどあかぬかも

吾衣摺有者不在高松之野邊行之者芽子之摺類曽

わがころもすれるはあらずたかまつののべゆくものはぎのすりもの

るまもとゝ云ハるハ、おもむき、行之者ゆきしのバ、所ゝ、之の訓

をゝ、爰ハ之の下香可おの字なるべしいつれ、おのれる、之ハ去の

ゆきるゝ、ゆきあれば、あゝうまもちあべ、吾衣て衣を芽子のもれ

[illegible]ハあらで、みくを行ぬれバ、をさごの衣とまれるこゝろもち

此暮秋風吹奴白露爾荒角芽子之明日将咲見

このゆふべあきのぜつまぬまくつゆよあらそふをぎのあをさのむこん

[illegible]ハ咲んとまるとゝ、ゑの[illegible]て咲せしとも[illegible]ハ角芽子花見爾

秋風冷成奴馬並而去来於野行奈芽子花見爾

あきのぜハもゝ[illegible]くなのめゝまあていさぬよゆのををぎのををみふ

ゆゝ[illegible]ハ行んなか

朝杲朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮

あさがほハあさつゆおひてさくといへどゆふかげゝそさきまされる

槿花ハ、章午花まあくで、槿花ハ[illegible]ハ[illegible]ハ、[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

春去者霞隠不所見有師秋芽子咲折而将挿頭

はるされハかすみかくれてみえざりしあきをまさけハをりてかざしむ

[illegible]

沙額田乃野邊乃秋芽子時有者今盛有折而将挿頭

さぬかたの[illegible]のあきをぎときもれハいまさかりなりをりてかざしむ

[illegible]

事更爾衣者不摺佳人部為咲野之芽子爾丹穂日而将居

ことさらにころもハすらで、をとめべしさきぬのをぎにわひてをらん

[illegible]

[illegible]

之ハ久ノ誤 竟ハ豆見ノ誤

秋風者急之吹来芽子花落巻惜三競竟

あきのせハちやくちさてぬちぐごのちるをみおくるひてこん

之ハ久の誤ちやくぐ、競竟と同じおなじくあかいうるるまくちさ

きて、竟ハ立見の誤なり、きくちさいらんこんこんて風ハ競ひくちら

じくるさまとなんこんのるれつれを極ちるぐ、竟ハ豆

見の誤なり、あくこんてみんちぐし、牡鹿の名ハ牡ちあ

ちくよるんこんいつさこ

我屋前之芽子之若末長秋風之吹南時爾将開跡思乎

わのやどのちぎのうれちぐ、あきのせのあきちんこきるさのんこんひて

乎一本手ハ花そよきそハまくきうるるをこをよあり

人皆者芽子乎秋云縦吾等者宇花之末乎秋跡者将言

ひとみちハちきをあきとこすれハをぐれのうれをあきくハちん

猿ノ猿ノ誤

之ノ下名ハモノ誤

吾人ハはぎをのくれの秋とこそ

はるくとこく

玉梓公之使乃手折来有此秋芽子者雖見不飽鹿裳

たまづさのきみのつかひのたをりくるこのあきハぎハみれどあのぬのも

むづさの枕詞、けるハ例まるるのこと

五日屋前爾開有秋芽子常有者我待人爾令見猿物乎

わのやどにさけるあきちぎつねるあくバわのまひとにみせまものを

手寸十名相殖之名知久出見者屋前之早芽子咲爾家類

香聞

たぎそなへうちもたるくいそのれバやどのわさぎさまにくるこのも

たぎハたぐりと同じくたぐり備へ、たげハのれたぐねバ也さ姉の秋の

くらあるたげよ同じ、秋の七種をたくさんに植ゑるまをたぎの之略

[illegible]

吾屋外雨殖生有秋芽子乎誰標刺吾雨不所知

わがのやどにうゑおほしなるあきはぎをたれかしめさしけむ

これをあはせんとおもひ　ものと　物をもとめぬやうにて　人の所しるふ

たよりなる　ものの　なるなると　なぎのえらのみ　ひらく　ゆゑなるべし

手取者袖并丹覆美人部師此白露雨散巻惜

てにとれば　そでさへ　ほのぬれぬ　をみなべし　この　ちらつゆ　ふちらまくを　しも

おりて　ものを　といふ　覆　おりて　ものを　ふれ　して　ものを　ふれ　ものを

白露雨荒爭金手咲芽子散惜兼雨莫零根

しらつゆは　あらそひかねて　さくはぎの　ちらむあめ　なふそね

ちらまくを　しのぶ　ふるまい　いつる　ことを

嫐嬬等行相乃速稲乎苅時成来下芽子花咲

をとめらの　ゆきあひの　わせを　かるときなる　ふるくも　なぎの　ちるさく

をとめらの　ゆきあひの　わせを　かるときは　ふるくも　なぎの　ちるさく

ふ　ものを　といふ　べし

朝霧之棚引小野之芽子花今哉散盛未猶雨

あさぎりの　たなびく　をぬの　はぎの　はな　いまや　ちるらん　まだ　あめの　ちるを

霧の　たなびく　をぬの　はぎの　はな　いまや　ちるらん　まだ　あめの　ちるを　しも

戀之久者形見雨為與登五吾背子我殖之秋芽子花咲雨家里

こひしくは　かたみ　ふるまひ　とて　わが　せこが　うゑし　あきはぎ　なさきふる　さと

こひしくは　かたみ　ふるまひ　とて　わが　せこが　うゑし　あきはぎ　なさきふる　さと

夫の遠き所に住るこのあるハ　指ひ　しるべ

秋芽子戀不盡跡雖念思恵也安多良思文将相八方

あきはぎに　こひつくさじと　おもへども　さとしえやあらし　まさしあらめやも

あきはぎに　こひつくさじと　おもへども　さとしえやあらし　まさしあらめやも

なハてぎるさのこゝをあてまできてゆくべくさくたもやハ敷皇の月
ゝくあてゝハやゝ惜むこゝあゆやしハ荻るバ又花るあゝべきやゝく

秋風者日異吹奴高圓之野邊之秋芽子散巻惜裳

あきかぜハひゝふけるふきあたのまゝあゝべのあきはぎちらまくをしも

丈夫之心者無而秋芽子之戀耳八方奈積而有南

まゝらをのこゝろハなしふあきハぎのこひのみやもちづみてあちなん

岩六夫のこハちゝみてゝ花るんやゝめづる
ゝるゝ月よゝゝ

吾待之秋者来奴雖然芽子之花曽毛未開家類

わゝまちあきハきたれどめ花のゝ花ゝきのまるでもいまゝゝさのゝ花ゝる
ゝるしのゝハ脇詞さゝゝゝるハさゝゝゝゝる

欲見吾待戀之秋芽子者枝毛思美三荷花開二家里

みまくほりわのまちこひあきハぎハえてゝたゝみゝおたまさきまちわ
たゝてハ繁きゝ

春日野之芽子落者朝東風爾副而此間爾落来根

かすゝのゝめのゝはぎゝちるゝハあさこちのかせにたぐひてこゝにふらゝね
こちのちゝ風のゝゝハあれゝゝくまれゝゝハあゝゝゝの風ゝゝゝのゝ

秋芽子者於鴈不相常言有者香一云言有可聞音乎聞而者花爾散去流

あきゝはぎハかりまあハゝゝハゝ風のこゝをきゝてハゝ風ゝちゝぬる
ゝゝ風ゝのゝまゝるゝんゝまでゝてゝあんゝゝゝゝゝゝゝゝ風のゝまゝる
ゝきのおゝゝれハ風ゝ逢ゝ
ハあゝふゝゝゝゝゝゝゝゝ

あきさらばいもふみもとむとうたぎつゆどしおひてちりそるこのし
ゑを嘉を春を一本とまりそ以
詠鴈
秋風雨山跡部越鴈鳴者射矢遠放雲隠筒
あきこのぜるゆまもへゆるかりがねいやとほざかりくもがくれつ
此ほ山風を山を越る雁ごゑの詳遠さうる空をるらしとつる八代云
の一なるべしいづれのりもちんこれハ山跡部とそれハ大後へはく山元
越るとハ吳く部ハ山のくくよりもべし者ニるまりふハうるびよりのくり
しきれハ後初越る雁しをしいも奥へ
明闇之朝霧隠鳴而去鴈者吾戀妹告社
あをぐれのあくごぎやかくりなきてゆくかりハわがこふる妹につげこそ
なぐれハかぐのまぐほのぐくきさらのよ岩こそ妹ことづてをしよこと

吾の言三誤

りまく吾と本言とまるハ誤くハ本ものよりて誤つ
吾屋戸雨鳴之鴈哭雲上雨今夜喧成國方可聞遊群
わがやどふなきてかりのあくるのうへはよりしなくるりくるゆく
今本國方可聞をくふつるうもとして遊群の二字を此方ハ故ち故ち
まくるく遊群ハゆくのかるまりひくるれハのく改つこハ若田翁説の
考へかのくハハぐろるるのあるりを屋の六表字ゐ屋
ゆくハ汝がかりのあへこのかくんとりるこ反世のかく屋ハ故事ニ
まゆるさまるのみきりくよりるるるなし
左小牡鹿之妻問時雨月乎吉三切木四之泣所聞今時来
等霜
さをしかのつまとふときるつきどよりがりのねきこゆいまもしも
巻六巻第五折木四哭之こくるもがくうれと例べしがくるハ

いつちくるまくもそれぞいまのしハ妙絶

天雲之外鴈鳴從聞之薄垂霜零寒此夜者

あまぐものよそのかりがねきゝしよりはれぬもかなしさもしこのよハ

をれハ如ゝ薄垂ハかちまぐ、義とかゝく、動れるくさもそ者

かゝくハ仮べし

一云彌益益爾戀許曽增乍

秋田吾苅婆可能過去者鴈之喧所聞冬方設而

あきのたのわがかりぞこのすぎぬれハかりがねきこゆふゆのこまけく

かりぞこのハ歌ゝの秋の田の苅婆加の字ゝ婆ーくいかり

葦邊在荻之葉左夜藝秋風之吹来苗丹鴈鳴渡

あしべなるをぎのはさやぎあきかぜのふきくるなへにかりなきわたる

和名抄野王案云荻和名乎木與亂相似而非二種矣、苗ハ佳ゝ苗也

万解十下　七

武ヲ戒ニ

一云秋風爾鴈音所聞今四来霜　そハなまゝのこと

押照難波穿江之葦邊者鴈宿有疑霜乃零爾

おしてるなにはのえのあしべハかりねたるかもしもの乃ふりてる

りてる枕詞ふゝハふゝを延ふく

秋風爾山飛越鴈鳴之聲遠離雲隱良思

あきかぜにやまとびこゆるかりのねのこゑとほざかりくもがくるらし

此ものゝうあいてり

朝爾往鴈之鳴音者如吾物念可毛聲之悲

つとにゆくかりのわがねハわがごとくかのれりくのもこゑのかなしき

つとハ神社のゆゑと弱いくれきつゝあてゝ以後くりかへしハ歌ゝ

多頭我鳴乃今朝鳴奈信爾鴈鳴者何處指香雲隱良武

たづのねのけさなくなくハかりがねいづくさしてのくもがくるらむ

ゑのゐハ鶴群ちるぐそれば雁ゐて雁群ちるゝ、弱いそれつれ君と
ねていてる伽ちて、ゆりつよ、ゐゐゐゐ、ゐゐのねし、音ちるゐゐちゐゐ、ちゐの
名のあく出れるちるゐ、武ゐゐ哉ゐ居れゐ、ゐ廣ゐ伝くあつ

野千王之夜度鴈者鬱幾夜孚歴而鹿已名乎告

ぬだくまのよわるかゐハ松ゐ、いくよゐへてゐれのゐをのる
夜横集ゐ紛ゐちゐちもかゐても拓ちれやゐる姉ゐ、ふかゐくゐちゐく、
ゐ命ゐもかゐゐ、ゐよゐをゐゐ、ゐゐ、ゐよゐて出ゐせゐちゐ、ゐ
をゐての八次の芸ゐ、ゐ夜ゐをゐあゐちゐれゐ

璞年之経往者阿跡念賀夜渡吾宇問人哉誰

あゐくまゐくまのへのけ、ゐ、ゐりてゐよわゐるゐれをゐふひとゐたれ
ゐゐよちちゐく、ゐの ゐゐよゐるくゐちゐ、ゐ紙ゐ誘のゐるをゐくいゐゐひ
一 ゐゐをゐ、ゐ年ゐ年のゐちゐ紙のゐもいてゐ、ゐ解ハ古き友し

ゐちゐめゐるまゐふ友をゐゐをひゐ、ゐ人ゐをゐ、ゐ人ゐをゐ、ゐ人ゐ
ゐれをハよゐゐを

詠鹿鳴

比日之秋朝開爾霧隱妻呼雄鹿之音之亮左

このごろのあきのあさけよきりがくりつまよぶおしかのこゑのさやけさ

紀ゐ寥亮をゐゐゐゐ

左男牡鹿之妻整登鳴音之将至極靡芽子原

さをしかのつまらのつとなくくちのいくらんきゐゐちびけちぎゐちら
ゐ、ゐ、ゐ、

於君戀裏觸居者敷野之秋芽子凌左牡鹿鳴嘗

きみまつとうゝぶれさきのぬのあきはぎさをしかのあくも

とき[illegible]の中ハ大和磯城郡の中[illegible]

鴈来芽子者散跡左小牡鹿之鳴成音毛裏觸丹来

かりきるかたぎハちりぬとさをしかのなくこゑもうらぶれぬる

たぎと鹿の名妻ともとぶらくよりの鹿のまつ[illegible]

うゝ[illegible]

秋芽子之戀裳不盡者左小鹿之聲伊續伊繼戀許曽益当

あきはぎのこひもつきねばさをしかのこゑいつぎいつぎこひこそまされ

つきねぐハつきあるゝ按ゝ丈夫のこゝハ[illegible]て仕たぎの意まゝやゝ

[illegible]ゝ此意ハ人のこゝぐと意[illegible]下の意こゝ[illegible]

仕たぎと[illegible]

万解十下　九

のまさるとゝ[illegible]いつぎのいハ愛語、[illegible]ハ下の伊ハ衍文の伊つぎつぎ

といふべし、[illegible]

山近家哉可居左小牡鹿乃音乎聞乍宿不勝鴨

やまちかのくいへやをるべきさをしかのこゑをきゝていねがてぬかも

[illegible]

山邊爾射去薩雄者雖大有山爾文野爾文沙小牡鹿鳴毋

やまのべにいゆくさつをハたけなりのれどやまにもさをしかのなくも

い行のいハ愛語、さつとハ狩人之大ハ佐[illegible]

足日木笑山徑来世波左小鹿之妻呼音聞益物乎

あしひきのやまのきゝせハさをしかのつまよぶこゑをきくのまさめを

山より[illegible]

有、麻の上之唐牟牡の子も

山邊庭薩雄乃禰良比恐跡小牡鹿鳴成妻之眼子欲号

やまべにはさつをのねらひかしこけどをしのなくなるつまのめをほりす

しこけどはなりなれどものとろくなくしかこむとりとほりはなまな

しもとり

秋芽子之散去見欝三妻戀為良思棹牡鹿鳴毋

あきはぎのちりゆくとみていづのみつまごひもとめしかのなくもし

りづくしはんのおもとぼれなさうるとこくそはは麻のみとおしてなりく

いづう

山遠京爾之有者狭小牡鹿之妻呼音者之毛有香

やまとをきみやこにあれはさをしかのつまよぶこゑはとりくもあるか

京ハ義とをきをいへべしかきハめづらきん

秋芽子之散過去者左小牡鹿者和備鳴將為名不見者之

号

あきはぎのちりすぎゆのはさをしかはわびなきせんなみそはとりみ

ひとをとどめはさびしくなるとびてもるんといふく号一名見み花

秋芽子之咲有野邊者左小牡鹿曽露乎別乍嬬問四家類

あきはぎのさきたるのべはさをしかのそつゆをわけつつまどひける

奈何牡鹿之和備鳴為成蓋毛秋野之芽子也繁將落

なぜをしかのわびなきをするそなぜあきのはぎもしげるらん

なぜとをとはべしはは麻のことばなるもるハなぜをしくはそぎのをしくち

ゆらくやあんとりとく

秋芽子之開有野邊左牡鹿者落卷惜見鳴去物乎

あきはぎのさきてちるのべのさとをこのかたちてまくをみちきぬるものを

このとの句はまことに此ほかもあるべし

足日木乃山之跡陰雨鳴鹿之聲聞為ハ方山田守酢兒

あしびきのやまのしたかげなくしかのこゑきくときはやまぢかくまて

さうげハ花ハあかいちやのかあのほとおなじ咲るあのしのぶよ

とうあよ春しくいつあきのよハきくを迄之ちらハもるを迄之

岩一の茶つまをてのこの例く奥ハ山田もるをとして、そこハ

時をのすゝをやを、菊を手伝よりられしれどよのうゝ

詠蟬

暮影乘鳴日晩之幾許毎日聞跡不足音可聞

ゆふかげよきちをくひぐらしこゑ聞けどあのあとをすも

ゆふかげハ夕をくひぐらしハ、こゑたちどりよ同じ

詠蟋蟀

秋風之寒吹奈倍吾屋前之淺茅之末蟋蟀鳴毛

あきのかぜのさむくふくなへわがやどのあさぢのすゑにこほろぎなく也

蟋蟀呂洲きりぎりすとよみられど爾れをこゝろぎと何ぞこれハ和名

抄ニ文字集略云蜻蛚精列二音和名古保呂木とよぶよりなる也

春海云蜻蛚とハ名ハ文選雪賦盈陽七哀詩ニ仰聽離鴻鳴俯聞

蜻蛚吟と名ハ李善の注ニ易通卦驗曰立秋蜻蛚鳴蔡邕月令章句

曰蟋蟀也名俗謂之蜻蛚といひ又古待ニ蟋蟀吟蜻蛚吟と迄して名ニ

いつらかれハ蜻蛚と蟋蟀ハ同物なれハ蜻蛚ハ古保呂木と書るべく古よう

蟋蟀ハこゝろぎの名なるべくその世すもそを名と傳へられハ志のよむ

べきこゝ、もべく第中蟋蟀とあるとこゝろぎと何ざれハ河内なるべく湖べ

こゝのそざるとこゝろぎといふのの古そ集ハ後の考ニ及ぶ也ゝ

[illegible]人あれば此集よりあらるるなどの名の侍るべくハ絶ていとゝ名をあ
まるあれバそのみ絶まべきなるあるべし、又弁ゐ[illegible]ゐきるあるべくもとゝ名を古と
集[illegible]度のあるハきゝかゝるとしへる名のゝとよるハ蟋蟀ゝ二名をこの中ゝ
きゝ[illegible]ゐる名のゝ侍ゐハ[illegible]ゐるゝ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ和名抄ゝ無名乾元
蟋蟀悉率二音、一名蛬、和名木里木里須と[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ

神名火之山下動去水丹川津鳴成秋登将云鳥屋
かみなびのやまもとゆるみゆくみづよかるがあきといふなりとや
かりつばめ去へ妹のあるらんとやいふなりとや
草枕容爾物念吾聞者夕片設而鳴川津可聞
くさまくらたびるものをしわがきけばゆふかたまけてなくかはづかも
ゆふまけ片向のこと
瀬乎速見落當知足白浪爾川津鳴奈里朝夕毎
せをはやみおちたぎちてしらなみにかはづなくなりあさよひごとに
そくハ俗ものくたぎちなり
上瀬爾河津妻呼暮去者衣手寒三妻将枕跡香
かみつせにかはづつまよぶゆふさればころもでさむみつまをしまくと
妻のもとへと人のまくらしのくること

百舌鳥百二説

詠鳥
妹手乎取石池之浪間従鳥音異鳴秋過良之
いもがてをとりしのいけのなみまゆとりのねけるなくあきをすぎぬらし
いもがてを枕詞、取石池ハ霊武紀ニ、行幸和泉国取石頼宮ニ〜ありつ
れもるべし、姓氏録ニ、取石造、和泉国諸蕃の下ニ出ル、和泉ニ
とろしの池ともいふなるべし、流の字従の従ハかろくんのべし、必ずハ初名、
ようこゑる野鳥なけべし
秋野之草花我末鳴百舌鳥音聞濫香片聞吾妹
あきのゝのくさはなわすれなきくらんこのかたきくわがいもを
ちどりハ百舌鳥ニ、百舌ハ鳥ニ、鳥ハ秋、そもゝの鳴ものを鳴ものゝ
のゝ草ハ草ハ花ニ、花ハ片聞ハ片待の借れ、いつくのこゝろもあり、片聞
といふなるべし、片まつわざとハ言を下ゆくとる鳥ゝ、なるべし

草花をうゑぞれてとあるハ芒一は芙蓉をうゑぞそとよるかー

詠露

冷芽子丹置白露朝朝珠斗曽見流置白露

あきはぎをおれけるたまつゆあさなさなたまとぞみゆるおけるーつゆ

冷ハ第とんちるく芒十一あきかぜと冷風しちう

暮立之雨落毎一云打零者春日野之尾花之上乃白露所念

ゆふぐものあめつるごとよかはてぐのあのをざなのうへのたまつゆ如もゆ

芒千云ふ芒ハ一本のめくゝちちれぐあゝくゝにの白芒穂之末乃しゝ

と一そ並歌て、左注ハ右海二首小鯛王宴居之日取琴登時必先吟

詠此歌也ゝくゝちゝ、ゆ之ハ左ハ北のゆしちちとえゆ

秋芽子之枝毛十尾丹露霜置寒毛時者成爾家類可聞

あきちぐのえだもとをゝまつゆじもおきさむくしときなりるかも

露第八秋の末花くちり吾といふ、たのそはるぐー

白露與秋芽子者戀亂別事難吾情可聞

ちらつゆゝあきのハぎとハこしひそれわくゝかくきわのこゝろのも

露とちきとえづるんハづれとわきぐきゝしもこ

吾屋戸之麻花押靡置露爾手觸吾妹兒落巻毛将見

わぐやどのをぐるはちべおくつゆゆてふれわぎてしちらまくもみむ

はちをハはちをひもえ妹ぐくもとるよ露のらんとてくぐやのこゝ

白露乎取者可消去来子等露爾爭而芽子之遊将為

ちらつゆとをとらバけぬべーいさこどもつゆあきはぎのあそびせん

露とぐくを対ゝおけバきりてハいて

秋田苅借廬乎作吾居者衣手寒露置爾家留

あきたゝかるかりをつくるわのをれバこるもでさむくつゆでいきてふる

和名抄云、毛詩云、農人作廬以便田事（和名伊保）とゝ、置のゝ曽のゝもと脱てる
ちゝさゝゝてハ例ゝゝこゞつゝ、彩古ゝゝ集ゝ此ゝ歌ゝ載て、つゆゝ乎ゝとゝ
ゝあり

日来之秋風寒、萩子之花令散白露置爾来下
このゝろのあきかぜさむし、はぎのはなちらすしらつゆおきにけらし

秋田苅、苫手揺奈利、白露者置穂田無跡、告爾来良思
あきたのゝかりほのゝ、とまでゆゝくなり、しらつゆハ、おくほだもなしとつげにきにけらし

一云告爾来良思母
苫ハ苫の俗字考ゝ、和名抄、尚書云、苫（和名度万）編菅茅以覆屋也とゝ、苫ゝ作ハ
手偏ゝ作ゝ、ゝ多ゝ同ゝ、ゝ、ハ偽ゝ、ゝ、ゝ、

備後甲奴郡矢田播磨赤穂郡八野郡、そいづこを上野とかるらん

朝露爾染始秋山爾鐘禮奠零在渡金

あさつゆよそめはじめてあきやまにしぐれなりそあかねさすかね

左わくるかねハあさまてしらみちのあしくまのこえ文廣女鐘と鐘花

右二首柿本朝臣人麻呂之謌集出

九月乃鐘禮乃雨丹沾通春日之山者色付丹来

なつのつきのさくれのあめにぬれとりかかてのやまハいろつきにけり

芝乗とをいつ、沾とりの八ゆ山まて沾するとふこの文廣女淺と鐘花

鴈鳴之寒朝開之露有之春日山守令黄物者

かりのねのさむきあさけのつゆならしかすかてのやまをそめかねて

みちとりて、おハ樣のて落るこのるれハ山みなしの色えさんハをそ

この八ゆ山べしとなハいそれれと野えの廣女の洲ようるべし

比日之曉露丹吾屋前之芽子乃下葉者色付爾家里

このごろのあかつきつゆにわかやとのはぎのしたはいろつきにけり

鴈鳴者今者来鳴沼吾待之黄葉早継待者辛苦毋

かりがねハいまハきなきぬわがまちしもみちをやつけまてハくるしも

廣の洲よりてきくしもみちとをそくへ、鴈のて鳴之廣女音花

秋山乎謹人懸勿忘西其黄葉乃所思君

あきやまをゆめひとかくなわすれそのもみちバのおもかゆらくふ

そ、ハ廣女ちかくよりてる之、妹心のもとへの洲ようけてなりしをそ、ちられ

しらくもの雲ををしい如きもみくりしらくハるとを延くる之、君ハくふの

雲傍ようてるかちてるを、四洲きみををるハ洲之

大坂乎吾越来者二上爾黄葉流志具禮零乍

おほさかのをわがこえくれハふたかみにもみちなかるしぐれふりつ、

大伴八束上臣、二上あるを、数と流ていろちるがごとしまたは

秋去者置白露爾吾門乃淺茅何浦葉色付爾家里

あきさればおくしらつゆにわがかどのあさちがうらばいろづきるけり

浦八俗にてまた

妹之袖巻来乃山之朝露爾仁寶布黄葉之散巻惜裳

いもがそでまきてのやまのあさつゆにわれもみぢのちらまくをしも

時の神と枕詞といひて、よる神なる花を注釈の城の山みやと名ハいそ

ぎき、宮ぎ、八束乃八年久の俗すく、まきむくといふ、打秀べし

黄葉之丹穂日者繁然鞆妻梨木乎手折可佐寒

もみぢばのにほひハしげしとも妻なしの木をたをりかざしん

みなもとなる木ハなれど、まとりとは佐てつまなりを対文まれるを

むとも、つまなりとは一種なれども、梨ハいとよく紫の深るこのまそ、

十九とあるこの歌の所行ふ、梨の黄葉をめでゝ

露霜聞寒夕之秋風爾黄葉爾来毛妻梨之木者

つゆしもにさむきゆふべのあきのぜにもみぢにけりとつまなりのきは

聞一本乃ふるでよきゝけりとのこのこゝろ

吾門之淺茅色就吉奥張能浪柴乃野之黄葉散良新

わがかどのあさちがいろづくよなばのをはりのなみしばのもみぢるらし

持統紀幸菟田吉隠とあり、大和宇陀郡、おくまに、伊賀ちかくそこの

ちかくし

鴈之鳴乎聞鶴奈倍爾高松之野上之草曽色付爾家留

かりのねをきゝつるなへたかまつののうへのくさぞいろづきにける

吾背兒我白細衣往觸者應染毛黄變山可聞

わがせこがしらぬのきぬをゆきふれば染もぞいろかへるやまかも

わがせこの、ゆきふれば、ゆきふれば、ゆきふれば

ゆきこれハ行く衣を解れなバ

秋風之日異吹者水莖能岡乃木葉毛色付爾家里

あきこのぜのひるけふふけバみづぐきのこのはもいろづきてにけり

空ゆく水ぐきハをこの枕詞之事也水莖の岡水門とあるハ流れを遠望詞にて、

風吹ハ水門ゆ波立ちぬ塩舸水門ゆ漕出ぬ

をゝゝ水門ハ水つくゝいなぎ、なぎ大和の地名

比久ハ引くゝざるなりといて

鴈鳴乃来鳴之共韓衣裁田之山者黄始有

かりがねのきなくゝなへゝからゝたつたのやまハふちぬそめけり

かゝゝゝゝゝ地詞

鴈之鳴聲聞苗荷明日後者借香能山者黄始南

かりがねのこゑきくなへゝあすよりハかすがのやまハふちぬそめけん

四具禮能雨無間之零者真木葉毛多不勝而色付爾家里

しぐれのあめまなくゝふれバまきのはもあまたしかねていろづきにけり

灼然四具禮乃雨者零勿國大城山者色付爾家里

いちじるくしぐれのあめハふるなくにおほきのやまハいろづきにけり

之謂大城者在筑前国御笠郡之大野山頂号曰大城者也

いちじるくゝハ顕ゝ也ふるなくにゝ雨降ぬ

風吹者黄葉散乍小雲吾松原清在莫國

かぜふけバかみぢてぬてちくもあゝのまつゝハさよかゝりなくに

多松原ハ其十七わぎもこをあゝ松原と云ふゝ、宮待ゝいにけるゝ

なるのゝ、この白砂ハ白砂ゝゝゝゝ、宮ちゝ、其十五だのゝ白ハゝゝゝゝゝ

ちきゝ夜久志久も、其十八ゝてゝもあひゝゝものとゝ夜久志久ゝ久毋らゝあれバ

[illegible]十二月ヅヽ、さて吾ハ君の佐ちんといろ、ハハよそのかぶちと風の
次よせく、そこぐわ[illegible]ぬとうく、小之原本サよ[illegible]
物念隱座而今日見者春日山者色就爾家里
ものもとかくろひとおて今ふれがとごのやまハいろづきふけり
[illegible]
九月白露負而足日木乃山之將黃變見幕下吉
なのづきのさく〜つゆおひてあしびきのやまのかみぢんみまくしもよろん
妹許跡馬鞍置而射駒山擊越來者紅葉散筒
いもがもとうまくくわけさていこるやまもこえれバえみぢ〜さつ〜
[illegible]
黃葉爲時雨成良之月人楓枝乃色付見者
もみぢしてるときなるなるべらしつきひとのかつらのえぶのいろづくこれば

和名抄云蓋名苑云月中有桂樹高五百丈[illegible]月の[illegible]
[illegible]月[illegible]
月のうつ[illegible]
里異霜者置良之高松野山司之色付見者
さとこしもハおくらしたかまつのやまのつかさのいろづくみれば
里異霜者置良之高松野山司之色付見者
[illegible]
秋風之日異吹者露重芽子之下葉者色付來
あきかぜのひよけふけハつゆをおもみたぐのしたばハいろづよれくわ
秋芽子乃下葉赤荒玉乃月之歷去者風疾鴨
あきハぎの[illegible]
[illegible]

真十鏡見名洞山者今日鴨白露置而黄葉将散
まそかがみなのほらやまはけふもかもしらつゆをおきてかもみちてゐるらん

まそかがみなのほらやまはけふもかもしらつゆをおきてかもみちてゐるらん

吾屋戸之浅茅色付吉奥張之夏身之上雨四具禮零疑
わがやどのあさぢいろづくよをはりのなつみのうへのあめしぐれふるらん

あさぢはらあさぢいろづくよをはりのなつみのうへのあめしぐれふるらん

鴈鳴之寒鳴従水莖之岡乃葛葉者色付雨来
かりがねのさむくなきしゆみづくきのをかのくずばいろづきてあめ

かりがねのさむくなきしゆみづくきのをかのくずばいろづきてあめ

秋芽子之下葉乃黄葉於花継時過去者後将戀鴨
あきはぎのしたばのもみぢはなつぎときすぎにしのちこひんかも

あきはぎのしたばのもみぢはなつぎときすぎにしのちこひんかも

紅ヲ紅ニ改

後ノ上日ヲ脱

明日香河黄葉流葛木山之木葉者今之散疑
あすかがはもみぢながるかづらきのやまのこのはいまのちるらん

あすかがはもみぢながるかづらきのやまのこのはいまのちるらん

妹之紐解登結而立田山今許曽黄葉始而有家禮
いもがひもとけとむすびてたつたやまいまこそもみぢはじめてあれけれ

いもがひもとけとむすびてたつたやまいまこそもみぢはじめてあれけれ

そは但を解よやうて結ひて立てゝ立田山と言ふいそれてはは
家ふるひてゝ結ふと立田山のやうにはもとぶ
ゝの上つ葉なとは、結ふとゝ立田山のやうにはもとぶ
而ハ葛の結ふなん、一二の白ハ立てゝいそんるの序のゝ

鴈鳴之喧之従春日有三笠山者色付丹家里
かりがねのなきてしはるかるのやまはいろづきにけり

かりがねのなきてしはるかるのやまはいろづきにけり

喧之の下日を抜せゝ

比者之五更露爾五屋戸乃秋之芽子原色付爾家里
このごろのあのときつゆふわがやどのあきのえぎはいろづきそめけり
此上句の白芽子の下葉をとかれるのこゝろ全く因奇なるこの秋
のたぐひを詠ず
夕去者鴈之越往龍田山四具禮爾競色付爾家里
ゆふされば雁のこえゆくたつたやまさぐれなさそいろづきそめけり
下句はなれば雁とびこゆるたつたやまとよめり
左夜深而四具禮勿零秋芽子之本葉之黄葉落巻惜嘗
さよふけてさぐれなゆきそあきはぎのもとばのきみぢらまくをしも
本葉は下葉と同じ
古郷之始黄葉乎手折以而今日曽吾来不見人之為
ふるさとのはつきみぢをたをりてけふぞわがくるこぬひとのため

人丸之黄葉早者一落に誤

君之家乃黄葉早落之者四具禮乃雨爾所沾良之母
きみがいへのきみぢはやくらるまはさぐれのあめにぬれにけらしも
きみ黄の上に之のてをわる者の下に落の字あり、乱きこゝろのこゝろ
てゝ
一年二遍不行秋山乎情爾不飽過之鶴鴨
ひとせにふたゝびゆかぬあきやまをこゝろにあかずすぐつるかも
春はゆくあくるとゝもにとびわたるゆのあとりはあるべし一年に二度
ゆるめわたるべきこゝろにはゆのあとりはふたゝびまぬわたりなくこゝ
ろ四よ
ゆるめわたるべきこゝろにはゆのあとりはふたゝびまぬわたりなくこゝ
ろ四よ
世中はまことこゝはゆのざゝ、老九よこゝ
つるこゝろゆくやこゝろにまかすべきつるこゝろはあるべきやこゝろ
と悟むこゝ
詠水田　和名抄云漢語抄云水田古奈太田墳也とあり
足曳之山田佃子不秀友縄谷延與守登知金

あびきのやまぐつるこひでぞとふなたぐふたへよ　そるもと去るかね
　　碧嶺　おろるべし　岩七石の上板のとき田をひでぞと絶ぐまたよそう
　てをとんとりてるかをいまぐをきたくもとよ仮ぐるもとたてんん
　　ふたとをへふを

左小牡鹿之妻喚山之岳邊在早田者不苅霜者雖零

さをしこのつまよぶやまのをのへなるわさだはかりでさもふるとも

　妻問鹿をあくれこそ吠れど陸れやまをんま稲田をバ苅くまでも

　かりでとも

我門爾禁田手見者沙穂内之秋芽子為酢寸所念鴨

わのかどふそるたをみれバさちのうちのあき萩をすきおもはゆるも

　男くやるころもぎ　男をくき　梅よ　男バ　保のあるとを　無係　くよ　ふ　ふる　ふ

詠河

暮不去河蝦鳴成三和河之清瀬音乎聞師吉毛

ゆふさらずかはつなくなるみをの川のさよをきのくるとをもも

　ゆさらずハ　ハ　べ　ゆ　ふ　ハ　ハ　ハ

零ニ晴ニ作

再ハ鳥ノ誤

吾背子之挿頭之芽子爾置露乎清見世跡月者照良思

わがせこのかざしのはぎにおくつゆをきよみせとつきはてるらし

無心秋月夜之物念跡寐不所宿照在本名

こころなきあきのつくよのものもとぃねらえぬふてをつるかな

物のくるのこゝろ、思ふこと、つくく

不念爾四具禮乃雨者零有跡天雲霽而月夜清烏

おもはぬよしぐれのあめはふりたれど あまぐもはれて つくよきよけし

物思ふこゝろ、あまもくもれて、つくく、鳥一本雨は降る

芽子之花開乃宇再入緒見代跡可聞月夜之清憲益良國

はぎのはなさきのうへにまたをみよとかもつくよのきよきこしよきらくも

再ハ鳥の誤なるべし、八雲のうへ、をまたみよとかもつくよの清き国、

且ヲ日ニ誤ル八之誤カ

八月十五夜月見

こゝろの空なるまとつゝまもくもらぬ月のほかく照らん、こゝ家と言ひつる

白露乎玉作有九月在明之月夜雖見不飽可聞

たまつゆをたまとあるきくのあかつきの月よ、見れどあかぬかも

詠風

戀作裳稲葉搔別家居者乏不有秋之暮風

こひつゝもいなばかきわけいへゐれば とぼしからぬあきのゆふかぜ

立つゝも八物思ひなれば物思ふ人の秋の夕風

もれば物思ふ人、秋の夕風

芽子花咲有野邊日晚之乃鳴奈流共秋風吹

はぎの花さきのべよりくれのかなへはあきのかぜふく

秋山之木葉文未赤者今旦吹風者霜毛置應久

あきやまのこのはもいまだあかねども けふふく風は霜もおきぬべし

あきやまの、このはもいまだ、そめねばけさ、ちくもぬれ、おきあぬべし

をみてをね、ふかのそもぬれ、ぬれつゝ、且、今日、暮る、一夜は、伝く、後、

久かゝ之の、ほ、ちるべし

詠芳

高松之、此峯迫爾、笠立而、盈盛有、秋香乃吉者

たのまとの、このみ、ゆ、ゆ、せ、みかさたらて、みちさかゆ、ゆ、あきの、このよさ、

峯も、迫、さ、て、秀、峯の、ちる、ち、く、多、く、せ、ち、ち、と、笠、立、と、又、ゆ、ゆ、佐、ち、

かさ、ち、ち、ち、い、ち、ち、和名抄、芸、久作、乃香、香草也、と、あり、と、翁、ハ、ち、れ、き、、宮、毛、ち、、

題の芳ハ草の、ち、ち、く、、、、、れ、ハ、松草、と、よ、ち、く、、、と、い、ち、、按、ち、和名抄、菌、草、糸、雅、

注云菌有木菌土菌

石菌和名皆多介　云、状如人著笠者也、と、、、ゆ、ゆ、ち、ち、ち

黄葉予令落四具禮能零苗爾夜副衣寒一之宿者

[illegible]

詠霜

天飛也鴈之翅乃覆羽之何處漏香霜之零異年

あまとぶやかりのつばさのおろしだの[illegible]

[illegible]

秋相聞

金山舌日下鳴鳥音聞何嘆

あきやまの[illegible]

あきやまは[illegible]

[illegible]

[illegible]

誰彼我莫問九月露沾乍君待吾

たそかれとわれをなとひそちのつきの[illegible]

[illegible]

秋夜霧發渡風夢見妹形矣

あきのよのきりたちわたりあさかれ[illegible]

[illegible]

乃八秀ノ誤

一三の日ハおちゝくゝいん序まく、ゝ、ゝ、ゝ

叫ハ刈ノ誤得ヲ将ニ誤

付ハ為ノ誤

秋田叫借廬作五百入為而有藍君叫将見依毛欲得

あきたこのわかとりをつくりかいほりしてあるらんきみをこそよもがも

田の下叫ハ刈の誤と得とハ将ヨ誤れて、元歌なるべくして、取、刈田仕の事なり

とのよみあるべし

鶴鳴之所聞田井爾五百入為而吾客有跡於妹告社

たづのなのきこゆるたゐゐいほりしてわれたびなりといもにつげこそ

これハむかしめいハあるべし、系統なることをもさらぬ物をおもひてよめ

るなるべし

春霞多奈引田居爾廬付而秋田苅左右令思良久

はるかすみたなびくたゐゐいほりしてあきたかるまでおもひけらむ

付ハ為の誤、苅ハむかしハかりとハ、昔代の付より刈るまでのこと

きといふ

万解十下　サヒ

橘寺守部乃五十戸之門田早稲苅時過去不来跡為等霜

たちばなをもりべのいへのかどたはせかるときすぎぬとてしらも

たちばなと桃花、ともに集中後紀オ3守部王としりつべしれバ、ちる

初ハ大和の地名、ちくさとよ、ちくさ、ちくさ、ちくさ、ちくさ、ちくさ

といふ里の家の門田をよるなり、五十戸ハ戸令3五十戸を里とせ

ムとこれバさもさも訓べ、れど、枕ハ訓べ、訓もあるべし、冠辞考3委し、久

ドく沼末ぬを恨る

寄露

秋芽子之開散野邊之暮露爾沾乍来益夜者深去鞆

あきハぎのさきちるのべのゆふつゆにぬれつゝきまさやよいふけぬとも

古今集3はぎのちるらんそのゝ露なるぬれてをゆくさ人しなくて

ちとるとハそとをとれるなるべし

根ヲ脱ヒリ

色付相秋之露霜莫零根妹之手本手不纏今夜者

いろづのふあきのつゆじもなかそねいもがたもとまのぬこよしは

零の下根のるとかよちゝ之屋なみよりく物ゝをづゝはそづゝと延

らゝ蛙ゝねあ花はぎゝこゝで秋ゆゝと寒ゝ寒ちゝゝゝいてゝ、

初句ハ寒露といゝん為のゝ

秋芽子之上爾置有白露之消鴨死猿戀爾不有者

あきはぎのゝへふおゝきたるしらつゆのけゝのもたまゝこひつゝあゝぞは

ぎ八今日ぎゝこゝ思ふ事を消可思奈萬思戀管不有者ゝちりどこは

死猿ハ死ちりゝつるゝあゝで為ちゝゝと妻はゝいるぞよゝゝ

の下爾ハ筒の俣ちゝゝゝちゝる

吾屋前秋芽子上置露市白霜吾戀目八面

わのやどのあきはぎのへなおくつゆのゝちじるゝゝけのこひ色やも

戀下爾ハ筒俣

とハふちじろゝいゝん序のゝ　しもハ伊解まゝ脱れて意じゝいゝ

秋穂乎之努爾押靡置露消鴨死益戀乍不有者

あきのほをしのにおしなべおくつゆのけのもたまゝこひつゝあゝぞは

秋のゝハ稲の穂ゝ之ハ之ちゝ之ちゝれ　ちゝハ同ちゝびの女ゝ　れも死ハ

佐ちゝゝ　之のゝくゝるちまゝゝとハ消ゝいゝん序のゝ

露霜爾衣袖所沾而今谷毛妹許行名夜者雖深

つゆしもにころもでぬれくいまゝゝもいもゝのもとゆのゝよハふけぬとも

ゆゝれハゆゝゝ

秋芽子之枝毛十尾爾置露之消蟋死猿戀乍不有者

あきはぎのえゝだもとをゝおくつゆのけのもたまゝこひつゝあゝぞは

ゝゝゝハたゝゝゝ同ゝゝゝとハ序ゝゝ　死ハ佐ゝゝ　ゝ為ゝ　ゝ　ゝ

ちゝる白露のゝゝ之の一ゝ

秋芽子之上爾白露毎置見管曽思努布君之光儀乎

あきはぎの うへはしらつゆ おくごとに みつゝぞしぬぶ きみがすがたを

たぐれとる 袁手くたるを とりて見て 思ひ出て 慕ふ時に

寄風

吾妹子者衣丹有南秋風之寒比来下著益乎

わぎもこは きぬにあるなん あきかぜの さむきころを したてますまし

あくまでも 所有

泊瀬風如是吹三更者及何時衣片敷吾一将宿

はつせかぜ かくふくよゐは いつまでか ころもかたしき わがひとりかも

はつせ風 ゆたかに吹 いつまでか 衣かたしき わがひとりかも

るるなれ 抜る 三更者の者 乎の誤 ちゝ 長なのかもとも よるとも

しあり

告八行文

寄雨

秋芽子乎令落長雨之零比者一起居而戀夜曽大寸

あきはぎを おちしなが雨の ふるころは ひとりおきゐて こふるよぞ おほき

大八佐ゝ 多のこと

九月四具禮乃雨之山霧煙寸吾告胷誰乎見者将息

なのつきの さくれのあめの やまぎりの いぶせきわが むねたれをみば やまん

一云十月四具禮乃雨降

山霧八 出ゝ 降 降 霧の誤 きとして いぶせきいくん 序とせと、

詩とゝ ゝ八 ゝを あひ ゝ ゝ やまぎとりつゝ 一本告の字なきもよろし

寄蟋

目録ニ蟋蟀ト書テ下モ蟋一字トセリ あれど 二字とするよ

例 ゝ ゝ ゝ ゝ 行 ゝ なん

蟋蟀之待歡秋夜乎寐驗無枕與吾者

こちらぎのまちよろこべるあきのよをぬるまてのまくらとされハ
雄蜂ハ物のかをゆく新ぐるとゝ、ろハ姉ぐるに枕まくらとして枕とし
ぬれハめるうしてなきとゝ、ぎ宿枕とされハ、ふるかねんともよ
寄蝦
朝霞鹿火屋之下雨鳴蝦聲谷聞者吾将戀八方
あさぐらとかびやのしたよりなくかはづこゑたにきこゆれとこひ方もも
紀ごとく枕詞、かびやハ、樵屋と遊べき俗屋ゝ、鳥ハ入居て、長ハ居ぐ
を殺、茅ぶくゆゝもとり、又者十一、あ一りの山田をとゞのおく
蚊火のとよあるハ初村の比田をとる鳥ぶ蚊やをとゆゝを火をとり
ゆ一、冠辞考ゝ者一、とハ、ゝ小ぶとゝくん序ゝ、ゝ、ゝ枕山のをとひ
をとるをとゝ、ゝのゝをゝきゝのハ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
寄鴈

出去者天飛鴈之可泣美且今日且今日云二年曽經去家
類
いでゝいるハあるとゝかりのなきあぶ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
初句ハ久しき物なゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、

雁の帰りの侵るもそれとあしのうれやもきぎのめく、秋はまつ人まちし
せしもちきりとて人の忘れるとき、れくく人はたれるを恨うん

寄鶴　鶴は秋なるやうまれば世の物とぞ
今夜乃暁降鳴鶴之念不過戀許増益也
このよるのあのとぶくぐもちのくれづのおもひはたゞこひてまやれ
くもちは雲の文字をこゝろ時をる時るづのめく、秋はもゞ物をひとえさ
やうもて、恋のく増るとしりつゝ也は後よ侵る例を

寄草
道邊之子花我下之思草今更雨何物可将念
みちのべのをゞるのもとの忍草いまさらしるふるのおもひたん
おもひのよはくもく侵あれど空うるる侵るるまなかるく、
めさのりくさ、みとそまるとど、ヒたれどもきて、更の字一字行

ちく人集何物二字となにと問ふ侵ず、上はなんといふんあるの侵のも

寄花
草深三蟋多鳴屋前芽子見公者何時来益牟
くさふかのとこちるきさらはもくやどのをゞみはいつるさまくん
秋就者水草花乃阿要奴鰒思跡不知直雨不相在者
あきづけば水草花乃阿要奴鰒思跡不知直雨不相在者
秋づけば、おるなれば、水は侵うるて真こ、あるは、岩は物のもるくふ、
五月をゞとこ、の要奴我ゝとの侵ふるるいるあく、物の熟めるとい、ひ、
の間は侵ふ玉、おは侵ふまれば百のあのはりめづとしひく、はよをん
はるるあく、卵はとくとつるく、直る舎ぬあはは侵つのちとうこ
何為等加君乎将猒秋芽子乃其始花之歡寸物乎
なのふもとのきみをとりあきぐのそのをつをのうれきものを

たのをこのいのでこのまをてづぎ、たぞの秋ものみて、ほうーくとうさが
ーきさとうこ

展轉戀者死友灼然色庭不出朝容貌之花

こいまろびこひいきあもとものぢろくいろふいでで、あけがほのはれ
このまろびいこ〜まろびこく、こころびもひそを、紅のやかはをの
いとんたるよりくるまく、不出といてくうるこのよあこ、がる信を
言出而云忌染朝貌乃穂庭開不出戀為鴨

ことていでで、ぞゆーーこ、あさがをのりるふきさてぬこひもたるかも
りよハきさでぬハたのうこいちぢろくきこハ明ぢうこ、ちゆ
いたぬ、ちたくこと

鴈鳴之始音聞而開出有屋前之秋芽子見来吾世古

かわこのねのたつちるきさてさてこるやどのあきハぎ、みよてわの世こ

左小牡鹿之入野乃為酢寸初尾花何時加妹之將手枕

きをーーのいこめのちきたつをばをいつーのいもの十くまくらをせん
いこをハ生七たちの尾鞍の細ぞ、神名帳丹後竹野郡納郡とあれど、都をさ西と
神社とるるはの西、和名抄丹後竹野郡とあれど、都をさ西と
よあるちるべし、呉川いるのあれど、武蔵の入間をといいるまし号つる
し、集中伊豆来とよみれば、そしい巳めて例べーー、とハ序まていつの
記る秋をせんとのつきこ、初とりつ初のあきかるとてよりつ四川を種ふ
せんとあれど、ちて立帖よる物をきんとをとでちれちるべきさてこそ
こるるーーいぢうるれ、將の下為とれ花せるるるん

戀日之氣長有者三苑圃能辛藍花之色出爾来

こるるひのけをのくーあれどみそのあかーあるのちるのいろよいでちふ
三八佐ちるるく御く、之房ちイ三と吾和うくいけのそのと点をう、から

あるハ仁花と、三四の白ハきなるもの、ちくん角の花と

吾郷爾.今咲花乃.女郎花.不堪情.尚戀二家里

わがさとに、いまさくなるのをみなへし、あきのつゆにしをれてこひふけり

宮もちろ、今さくなるハ、新よ咲くるを、いとなつかしう今ちるもいとあはれ、新来

仁三年り

詞書のこゝろ、ものつゝみなくて、あてやかなるもの、ちるもいとをかしう

之海ゞ作花と、之屋ゞ女郎と娘部四ゝ

芽子花.咲有乎見者.君不相.真毛久二.成来鴨

をとゝしのたれかけるをみれば、きみあはずまことしひさしくなりにけるかも

うるはしくこゝろ、ものをいとあはれ、ものをいとあはれ、ものをいとあはれ、

ものをいとあはれ

朝露爾.咲酢左乾.垂鴨頭草之.日斜.共.可消所念

あさつゆにさきてさびたるつきくさのひさしくなるをよけぬべくおもほゆ

きさびハ進之、芽の葉とけぬるゝ、ふべ、メくれよ思ちるゝく、変るんの

まちをよ、たとよ、葉伊を、下よ紅きタハけめる時以そのとよ、変るも今ゝ、

つゆくさとよみくげめ、ゝとうけるゝ、のとり、和名抄鴨頭草 都波久佐 と

あわ、とも、つゆくさといふ、たよりつきくさ、つゆくさ、といふるもや

長夜乎.於君戀乍.不生者.開而落西.花有益乎

なのゝきよをこゝろみよこしつゝいけらばさきてちりぬるらまを

いくゝ、ぞ、ゝ、ゝあらんよりハのそえ

吾妹兒爾.相坂山之.虻為酢.寸.穂庭開.不出.戀渡鴨

わぎもこにあふさかやまのはるさめ、ほはさきでこひわたるかも

をとゝき陸奥ゝ、稜よりるを異ゝ、稜よりるまでかるゝ、不出ゝ

いとゝでハうけめ例ゝ

卒爾.今毛欲見.秋芽之.四搓二.将有.妹之光儀乎

いさゝかふいまもみのり　あきはぎの　さるひはあらん　いそのかみ　ふるのなかみち

辛未、問いさゝかみよとあれどよりもり、岩田辛未、岩七伊古作日命〜ちる

小田ゝ　ちるゝ　ゆふ　よいて、撰八集中　多を撰といふ　まられば　ちるひのゆふ

用ゝを、縄をとるをなよよいて、杜さきのめ　さるゝ　ゆふ　かりて　えまも

えまりきゝゝ　宮ちゝ　二八豆の　ほゝ　さるひて　あんのゝ　ひとり

秋芽子之花野乃為酢寸穂庭不出吾戀度隱孀波母

あきはぎの　はなのすすき　ほにはいでず　わがこひわたる　ものかもは

花野八地名　あゝぞ　一　その　ゝ　八別　さゝ　ゝ　ゝ　波母八波也　ものかもは

ゝ　敬ゝ　解

五月屋戸雨開秋芽子散過而實成及丹於君不相鴨

わがやどに　さきゝ　あきはぎ　ちりすぎて　みのるまでに　きみまあはぬかも

半七　ちりすぎ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

吾屋前之芽子開二家里不落間爾早来可見平城里人

わがやどの　はぎさきぬ　ふたさとは　ちりぬまゝ　まやきてみませ　ならのさとびと

石走間間生有貌花乃花西有来在筒見者

いはばしの　まゝ　ふおひたる　かほはなの　はなにしあれば　きつゝみるべし

いそ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

藤原古郷之秋芽子者開而落去寸君待不得而

ふぢはらの　ふるさとの　あきはぎは　さきてちりぬと　きみまちかねて

元明天皇和銅三年遷都藤原ゝ奈良ゝ都を遷させたまひ

後、於藤原ゝ居ゝる人の、ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

秋芽子乎落過沼蛇手折持雖見不怜君西不有者

あきはぎをちりもすぎぬべみたをりをてみれどもさびしきみかもあるねば

神名より三の句へつづくさびしは不樂のこと、蛇は和名倍美なれば かなは男ひさう

朝開夕者消流鴨頭草可消戀毛吾者為鴨

あさがほはゆふべはけぬるつきくさのけぬべきこひもわれはなるかも

時代をつゆくさとよもんとあきはいろけぬるくさぐきちぐさとなるうつ八

さもべきえとてし咲ふいろ、されど和名抄の例よりくさ時つきくさとよむ

蜻野之尾花苅副秋芽子之花乎葺核君之借廬

あきつのゝをばなかりそへあきはぎのはなをふきねきみのかりほを

あきつは大和吉野郡、考へあきつのゝとばなかりそへあきはぎはなをふきとばるさうきこゝろ、此ふの指のさまをくこゝろ、俗れてち

よくこゝろのくしをのそれはふのせを延えん草とかくさねといつるの間じ

咲友不知師有者黙然將有此秋芽子乎令視管本無

さきあれどもしたちもびあるべきあきはぎをみせつゝとなる

ゆくりもたつつもとあるあきはぎ、これはあるべくもあらぬとひのまれんとと

そゝるり

寄山

秋去者鴈飛越龍田山立而毛居而毛君乎思曽念

あきされば かりとびこゆる たつたやま たちてもゐてもきみをこそおもへ

とはたてもとはたゐもこゝろのこと

寄黄葉

我屋戸之田葛葉日殊色付奴不座君者何情曽毛

わがやどのくずばはひをるづきあきぬきみはなぶこゝろぞも

座の上一本来のこゝろ、葛の中のこゝろ分もぐ沒分見ちがんは必信のごとくこゝ

足引乃山佐奈葛黄變及妹爾不相哉吾戀將居

あしびきの やまのもみぢ の そめつるは たれ ぞ ぬしの ひとりふあきぞや わがこひとらん

さちゝつゝ八和名抄五味作祢加ゝゝ豆良 ゝゝ葉ちるものなれど、まさきのづらの

ゆくへもなくなりぬるもこゝろ

黄葉之過不勝児乎人妻跡児乍哉将有戀敷物乎

もみぢ葉の すぎがてぬこを ひとづまと みつやあらんこひしきものを

いとゝこゝろぶの八梅花人妻紅葉ゝ歌ゝ

寄月

於君戀之奈要浦觸吾居者秋風吹而月斜鳥

きみ を こひ なのうらふれ わがをれば あきかぜふきて つきかたぶくら

きみ二ゝ名ゝの浦ゝ吹ゝ

秋夜之月疑意君者雲隠須臾不見者幾許戀敷

あきの よの つきかと きみ を うたがへり くもがくれ しばし もみねば いくだこひしき

鳥八雲の俤

耳八在ノ誤カ

かと疑意とゝるハまふくゝと隨意ゝもるゝ心ゝ思ハれ心ゝ月ゝ

あとゝいふ

九月之在明能月夜有乍毛君之来座者吾將戀八方

なのつきの ありあけの つくよ ありつゝも きみ が きまさば われ こひめやも

土ハありつゝいひつゝ久料の

寄夜

忍咲八師不戀登為跡金風之寒吹夜者君乎之曽念

しのびゑ の やつかし こひじと すれど あきかぜの さむく ふく よは きみ を ぞ おもふ

忍八吉の隠ちゝんの

惑者之痛情無跡將念秋之長夜乎寐師耳

わびびと の あるこゝろ なと おもふ あきの ながよを ぬしか

実ゝ九惑人ハれすちゝとゝ者ちゝよいつゝあくゝの惑者と空もものさと

ひとゝよみゝ里人のことといつまふちんの者十八日惑ゝもゝと度度世流
とあれば、元唐衣の或者春ハ語ゝ、寐呼耳をねさゝしてのそゝ例ゝれ
どゝ、ちのようもゝくもち、耳ハ左のゝのゝのゝすゝ語れるかゝん、さて寐のゝ
不のゝ字ゝゝべきゝと集中不のゝ字ゝを書ゝる例ゝゝ

秋夜寄長跡雖言積西戀盡者短有家里

あきのよゝとなゝかゝといへゝどゝつゝもふゝゝこひをつくせバみゝゝのかゝけゝ

遠近ゝゝきへゝるんゝゝゝゝゝ

寄衣

秋都葉爾爾寶敝流衣吾者不服於君奉者夜毛著金

あきつゝはゝゝゝへるゝゝゝゝれゝきゝゝゝゝゝ

二の白ハ[illegible]と[illegible]ハ色黄と赤いろとあれどさら[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ひ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ二葉と下よる[illegible]
いつり

雨零者瀧都山川於石觸君之推情者不持

ありあれハたぎつやまのそいそふ[illegible]きみ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

右一首不類秋謌而以和載之也 [illegible]

譬喻歌

祝部等之齋經社之黄葉毛標繩越而落云物乎

はふりらの[illegible]
[illegible]神代紀於是中臣神忌部神則界[illegible]端出之繩[illegible]
俱梅 [illegible]和名抄敬氏家訓云注連之利久倍奈波
[illegible]
[illegible]
[illegible]

旋頭歌

蟋蟀之吾床隅鳴衣本名起居管君爾戀爾宿不勝爾

こおろぎの[illegible]
いねのてなくよ

[illegible]月蟋蟀又我牀下とよるかてい[illegible]

[illegible]
皮爲酢寸穂庭開不出戀乎吾爲玉蜻蛉直一目耳視之人故
[illegible]
はるさきぬきほふさきでぬそひとわづもくるかざろしめたいさめの〜
みーひとゆをふ

一三の句ハ五ひこ之てくるくるくるくるかざろしのハ枕詞

久雜歌

我袖爾電手走巻隱不消有妹爲見
わがそてに[illegible]あられたばしるまきかくしけさもあらんいもがみまくを
まさかくしハ[illegible]神のもきなる者しいつべし電とはさとーてあんと云
足曳之山鴨高巻向之木志乃子松二三雪落来
あしひきの[illegible]

巻向之檜原毛未雲居者子松之末由沫雪流
[illegible]
[illegible]
足引山道不知白杜枝毋等乎乎爾雪落者
あしひきのやまもしらかしのえだもとををにゆきのふりくる
[illegible]
[illegible]
[illegible]

彌作　元慶年一首の上件の[illegible]

詠雪

奈良山乃峯尚霧合宇倍志社前垣之下乃雪者不消家禮
なのらやまのみねなほきりあうべしこそまがきのしたのゆきはけぬらめ
きえはてぬ天雪合降もいまだそれは消なれと思ふる
殊落者袖副沾而可通將落雪之空爾消二管
ことふらばそでさへぬれてとほるべくふりくるゆきのそらにけぬつつ
こそふらば、そでさへぬれて、とほるべくふりくるゆきのそらにけぬつつ
夜乎寒三朝戸乎開出見者庭毛薄大良爾三雪落有
よをさむみあさとをひらきいでてみればにはもうすらにゆきはふりたり
一云庭裳保杼呂爾雪曾零而有
にはもほどろにゆきぞふりける
にはもほどろにゆきは太と大と後、元慶年中と改

暮去者衣袖寒之高松之山木毎雪曾零有
ゆふされば衣手さむし高松の山のこのめごとにゆきぞふりける
此歌は高松と高松とまつ山は此ところ河内にかぶれて、宮もり、寒の下之
八文の字まく、さむくしいて、さむしとそいふこのうた
吾袖爾零鶴雪毛流去而妹之手本伊行觸糠
わがそでにふりつるゆきもなごれゆきていもがたもとをいゆきふれぬか
神ゆまに、雪の面白きを、ひとりそ、妹が袖をもふれよといふ、伊八度
後、糠不殺の詞は偽なり
沫雪者今日者莫零白妙之袖纏將干人毛不有惡
あわゆきはけふはなふりそしろたへのそでまきほさんひともあらぬを
妹と逢はんとてあれば神神と繽紛あるを將干人のなきを、孤白さ
あるをくも訓べそれど、惡はをのうるを見しるを、元慶年夫と

陰ヲ隠ニ誤

あもをのかるべし

甚多毛不零雪故言多毛天三空者陰相管

たちまちぶる雪ゆゑ雪ゆゑこちらくもあまつみそらハくもりあひて
雪ゆゑハ雪なるものとこちらハ言葉なく、くもかるゆゑ、言ハ許の
かるゆゑにくもるべし、陰とて隠る詞なる、えんにかみよ
ゆくゆくこだくもるべし

改つ

吾背子乎且今且今出見者沫雪零有庭毛保抒呂爾

わがせこを、いまのいまのと、いでみれば、あとゆきふれるにはもほろに

四河けつつけつつあれど、よろ且今日且今日とまちハけつつけつつとよみくけ
へり、ちハ出てれば、ゆふハ毎日のまちてハ来ぬ、れバ日のまを保ど
ていまのいまのと待べきを知せるなり

足引山雨白者我屋戸爾昨日暮零之雪疑意

万解十下　四十一

あしびきのやまふるさとハわがやどにきのふのゆふべふりしゆきかも

詠花

誰苑之梅花毛久堅之清月夜爾幾許散来

たれのそのうめのはなもひさかたのきよきつくよにいくばくちりく

花の字の下曽を脱しゆるう、又毛ハ毛の誤なるかとおもふ

梅花先開枝手折而者裏常名付而與副手六香聞

うめのはなまづさきえだをたをりてハつねなづけてよそへてんかも

妹の方ゆく我つゝをすく我ゆくよりてぶれ、ひとりてんかとく生ハ

昧雪ふりてさかる梅のふるまいやばよりてんもくよりて

誰苑之梅爾可有家武幾許毛開有可毛見我欲左右手二

たれのそのうめにあらんかくもさきたるかもみがほしさまたるもみのびるまでに

左の字ちがへ、男の家の梅とおもふ、ほめて非苑の梅ハ土了

ねぐら、とそてもみえまりく、あつぐるまでふさとする沖とりこ、空もそ家ハ良
の語ろく、あるらんもすぐーとらて
来可視人毛不有爾吾家有梅早花落十方吉
きてるみべきひしてもあるくふわぎへるるうめのをつをるちるぬともよ
雪寒三咲者不開梅花緩比来者然而毛有金
ゆきさむみさきハひらけそうめのをるよーるのごろハさてもあるかね
上ハ雪てまぐ字名れバ字ぐき義のさこのぬをひてをハよーー不字ーくく
きてもあれーー咲ぬ又うつろひちんるのをーきをりてとこがるのねハ
既こ出よてて、まそれバちまくをみ梅を志ゲハさうびみ字みてて
ぐもてもあり

詠露

為妹未枝梅乎手折登波下枝之露爾沾家類可聞

はるのためほつえのうめをたをるとハ枝つえのつゆに、ぬれふけるこのも
未枝の花とゝもわ〳〵てハこりて、てのをと男ゝり

詠黄葉

八田乃野之浅茅色付有乳山峯之沫雪寒零良之

やたのぬのあさぢいろづくあちやまみねのあわゆきさむくふるらー

やたの野ハ神名帳大和添下郡矢田坐久志玉比古神社、和名抄ニ添下郡矢田
あて者乳山ハ越前敦賀郡之、和名抄ニ敦賀郡の秋のくーきをとくく、越路の山を
はりしやるとくあるる

詠月

左夜深者出来牟月乎高山之峯白雲将隠鴨

さよふけバそでこんつきをたのやまのみねのーーくくしかくしそこんも

夜ふけて出べき月の出ぬハるこさ山のきの原てこりこんひこ雲の奈ゝて

ちり後て入れるこの

冬相聞

零雪虚空可消雖戀相依無月經在

ふるゆきのそらふりあぐくこれだにあつものをなぞつきそで屋ふけく

ふるゆきのそらふりあぐくこれだにあつものをなぞつきそで屋ふけく

泳雪千重零敷戀為来食永我見偲

あるゆきはらへまよわたけこしくのけるぎさこれハみつて出るだもむ

そ布重と里ゆ後くちさ〜長せろ元度ゆまて取立くのーくハ四句

けもちハよてまくゆ、高そぐたんてつて塔ものぐんも

右柿本朝臣人麻呂之歌集出

寄露

咲出照梅之下枝置露之可消於妹戀頃者

さきでくるうめの枝づえおくつゆのたまぬくいもふこふるこのごろ

初句説さきでくるまあれど照をたるとゆぐうぐれハ字のまくよ消て四年

実旨ようさられて徒ろ〜ず実臣照八鳥の誤ものさきいるうめのえをいろ上ハ屋のこ

寄霜

甚毛夜深勿行道遍之湯小竹之於爾霜降夜鳥

えるのはぐもよつけてるゆきみちものべのゆぐ〜ぐらへみ志ものふるよを

ゆぐ〜ハ五百小竹ふくふ小竹の矣きとり上、半一川上のゆつる村とよるゆの

ふる四ー

寄雪

小竹葉爾薄太禮零覆消名羽鴨將忘云者益所念

さのたふはぐれまちおかひけるぐうもわたれんとくばまておもゆ

一二の句ハ序まく、雪のけるを身の老るよひ〜ちまぐ身をさ〜ば社

[illegible]

霰落板敢風吹寒夜也旗野爾今夜吾獨寐牟

和名抄霰美曽礼とあれど、事多あれとよめり、板敢いろまくよむ

[illegible]で、敢ハ隙のまるごの誤なるう、されど[illegible]せるふハよりとかも、

二字ともに誤れるべし、旗野ハ神名帳高市郡波多神社波多熊井神社、和名抄高市郡波多とあり、[illegible]

むくよもるやとよいもるひとかねんといふ、[illegible]考べし

吉名張乃野木爾零覆白雪乃市白霜將愛吾鴨

よなばりの、きのもとにふるしらゆきの、[illegible]

吉名張ハ[illegible]

[illegible]

一眼見之人爾戀良久天霧之零來雪之可消所念

ひとめみしひとにこふらくあまぎらしふりくるゆきのけぬべくおもほゆ

思出時者為便無豐國之木綿山雪之可消所念

おもひいづるときハすべなみとよくにの[illegible]

[illegible]

本綿のもとよりも、[illegible]

如夢君乎相見而天霧之落來雪之可消所念

いめのごときみをあひみてあまぎらしふりくるゆきのけぬべくおもほゆ

との一眼[illegible]

吾背子之言愛美出去者裳引將知雪勿零

わがせこがことうるはしみいでゆきハもひきまとはんゆきなふりそね

わゞをこのゆをとりて上をのゝるそしれバをんなを
バをんと引ゝ志のをとりて人をうゝべ名れバ俗ゝ
梅花其跡毛不所見零雪之市白兼名閒使遣者
らめのをるゝれるもみゝをゝるゆをこのいちゝろけんをまづのしやゝらバ
一云零雪爾閒使遣者其將知名
とハいちゝろゝゝゝゝ市のゝ同使ハ改む一なの方をれゝをゝんをハ毛
志つけるをゝれとをゝれんゝりゝゝゝ年をみあゝゝ
天霧相零来雪之消友於君合常流經度
あまをゝをゝれゝゝるゝゝゆをゝのゝゝけるゝゝゝきみをあゝんゝなゝゝゝゝゝゝ
降雪の且消るあく毛をゝをゝゝゝゝゝゝ

社ヲ祚一誤

を、ゝ年の住家ニハいとしたうと、時よりしい住人よりこゝぐるるるべゝ宮
ものゝ[illegible]ものゝ[illegible]百住ゝ獣も無ハ消去意の住まく、けるゝ[illegible]
ちるべゝとそう

寄花

五日屋戸爾開有梅乎月夜好美夕々令見君乎社待也

わがやどのさきさくうめをつくよみよるゝゝみせんきみをこそまて

古今ニ花ゝさきみをこそまてとあハ古河ゝ社ゝを祚ニ誤一ものゝて取つ、
也いとゝゝふ歌なる

寄夜

足檜木乃山下風波雖不吹君無夕者豫寒毛

あしひきのやまのあらしハふのねとしきかねてさむしも

嵐ハまこゝふねとも、ものとねぬ夜ハさてとゝかねてといるハまゝ寒も

入日さゝぬほのゝゝあらぬ[illegible]

萬葉集巻第十

万解十下終 四十七

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan